ILC 東北誘致

国連防災世界会議パブリック・フォーラム「ILC誘致と国際学術研究ゾーンを考える」は仙台市青葉区の複合商業施設・AERで開かれた。東北経済連合会主催で、約300人が参加。本県からも県国際リニアコライダー（ILC）推進協議会の谷村邦久会長や市民らが駆けつけた。東経連の高橋宏明会長は「日本の科学技術立国に貢献し、大きな波及効果が見込まれる。ILC実現に全力で取り組む」とあいさつ。中央大理工学部の石川幹子教授による講演やパネルディスカッションが開かれた。参加者は世界候補地とされる岩手、宮城両県の北上山地（北上高地）への誘致の意義や課題を学んだ。

ILC誘致と新たな国際学術研究ゾーンを考えるパネル討論には、岩手をはじめとした東北で暮らす外国人も多く参加した＝15日、仙台市青葉区・AER

築こう 科学の明日

ILC誘致推進フォーラム

世界の力集めるとき 山下さん

期待したい若者世代 三輪さん

都市計画の視点必要 小貫さん

外国人ニーズ調査を クリプスさん

山下 了さん

三輪 卓さん

小貫 勅子さん

アマンダ・クリプスさん

吉岡 正和さん

吉岡さん「ILCは高度な科学技術を要する。初めに、科学技術が防災とどう関わるか聞かせてほしい」

山下さん「防災技術は自然を恐れ、自然を知るところから始まる。基礎科学に始まり、人間社会に及ぶ自然の脅威に耐える技術をつくっていく。（物理学者の）私たちは自然を知る分野に力点を置く。それを防災にどう役立てるかとなると、建築工学や心理の研究などもある。さまざまな技術が積み重なることで防災や（災害）予測をできるようになる」

小貫さん「少し前まで都心部の過密が問題だったことを考えると、人口減少や高齢化を逆手に取った都市計画の視点が必要だ。土木技術の発展でどんな土地でも建物を造れるようになったが、大震災は土を盛った土地に液状化の危険性があることをあらためて示した。人口減になれば、こういう土地を積極的に使わなくてもよくなるメリットもある」

クリプスさん「震災発生時、県庁で働いていて、ネットを通じてライフライン情報を県内在住外国人に発信した。ネットは日本語が不自由な外国人でも情報を得ることができる。そのネット技術は欧州合同原子核研究所（CERN）の研究開発を通じて生まれた。ILCが実現すれば、新たな技術が開発されると期待される」

吉岡さん「国際プロジェクトのILCは高度な技術が集積され、加速器技術は医療や産業にも役立つ。直接的な効果は宇宙誕生の謎を探ることだが、社会的に与える効果も大きい」

クリプスさん「東北在住の外国人にニーズを調査し、まちづくりを進める必要がある。外国人が1万人増えれば、外国人向けの商品が売れたり、ビジネスチャンスが増える。一方、言葉や文化の壁があり、宗教や食文化の違いもある。相互理解に努力しなければならない。医療、行政機関では多言語のサポートがほとんどない状況にある。結構大変なこともあるが、ILCによっていろいろな国の文化が混じり合うビッグバンが東北で起こる。本格的な国際都市が待っている」

小貫さん「ILCの部品は海から陸揚げし、内陸で建設する。海から内陸まで北上山地周辺が一体となった新たなまちづくりができそうだ。ILCの稼働による排熱を暖房に利用したり、地元の木材を研究施設の建設に活用できる。東京五輪（の選手村）では水素を用いた交通システムが検討されるが、高齢化に備えてILCキャンパスで自動運転の交通手段など実験的に取り組めれば面白い」

三輪さん「CERNに当社の製品を納めている。2012年にヒッグス粒子が発見されると、貢献した会社として世の中に知れ渡った。それで自信が付き、スマートフォンに使われる基板などの生産が増え、成長することができた。ILCが誘致されると科学技術は必ず進歩すると思う」

吉岡さん「日本は豊かな山や海があり、教育レベルも高い。豊富な資源を持つ国であり、将来に希望が持てる。ILC実現後の地域を支える若者へのメッセージを聞きたい」

三輪さん「若い学生には是非、日本の科学技術を支えてほしい。日本人はものをつくるのが得意。頭はシャープであり、良いものもつくる。世界で注目される航空会社やコンピューター会社はほとんど日本の企業が支えている。ILCの稼働が期待される15年後は、ハードも日本でつくれるようになることを若い世代に期待したい」

山下さん「CERNは設立から60年が経過したが、今でも他者が取り組んでいない分野に挑戦したいと、熱心な若者が世界中から集まってくる。向こう50年、100年と続く科学的拠点をつくるのは並大抵のことではないが、実現のためのエネルギーを世界から集めるのは今だ。そのためにできることは協力したい」

パネリスト

○東京大素粒子物理国際研究センター准教授
山下 了（さとる）さん

○有沢製作所専務執行役員（新潟県上越市）
三輪 卓（たかし）さん

○東北大キャンパスデザイナー
小貫（おぬき）勅子（ときこ）さん

○県海外情報発信専門員
アマンダ・クリプスさん

コーディネーター

○岩手大・東北大客員教授
吉岡 正和さん

講演「ILC誘致と世界に学ぶ国際都市 これからのまちづくり」

中央大理工学部 石川 幹子教授

素晴らしい北上山地 迎える覚悟と志持って

「復興もILC誘致も広域的視点に立ったグランドデザインが必要だ」と提言する石川幹子教授

東北は震災で大変な被害を受けたが、文化、伝統、最先端の科学技術、志が結び付くことで、世界でも類を見ないイノベーション（技術革新）を起こせると思っている。

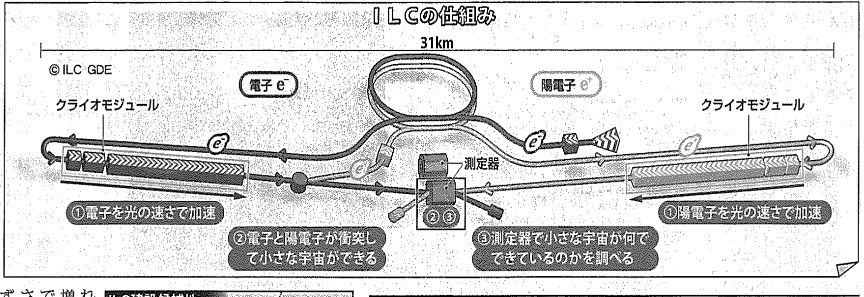
ILCの国内候補地選定に、社会環境基盤の視点から関わった。北上山地に行き、こんなに素晴らしい地域があるのかと感動した。極端な造成工事も必要なく、土地もまとまっている。

白羽の矢は立ったが、今後は迎える覚悟が必要だ。自分たちの街の将来ビジョンを考え、世界のために地域を役立ててもらう志がなければいけない。

人と自然の共生はどうあるべきか。ILCの建設地はこの人類に突きつけられている課題に、先端的な答えを出さなければならない。東北には、人と自然が手を携えてきた素晴らしい文化がある。

一方、復興やILCに広域的視点でのグランドデザインがないことは課題だ。奥州市出身の政治家後藤新平は「大風呂敷」と言われたが、今、東北にはパーツだけで風呂敷がない。誰かが風呂敷を広げなければならない。

東北は素晴らしい可能性を持つ。財産はあるのだから、ここからが知恵の見せどころだ。



注目集める計画の行方

「世界唯一の候補地」北上山地

課題は巨額建設費

国際リニアコライダー（ILC）計画を推進する国際研究者組織は本県の北上山地（北上高地）を「世界唯一の候補地」と絞り込んでおり、計画の行方が国内外の注目を集めている。建設は科学の発展や技術革新が期待される半面、8千億円を超える巨額の建設費確保が課題だ。日本政府は現在、誘致の是非を検討しており、費用分担に向けた国際交渉やオールジャパン体制の誘致を展開できるかが実現の鍵となる。

本県の同山地への加速器誘致は1991年、ILCの前身計画の時代に始まった。県は「建設適地」を証明するため科学的調査を重ね、花こう岩帯が連なる活断層のない強固な岩盤が広がることを確認した。2011年3月の東日本大震災後も安定した状態を保っている。

13年8月、研究者のILC立地評価会議は同山地を国内候補地に選定したと発表。同10月にはILC計画を推進する国際研究者組織リニアコライダー・コラボレーション（LCC）の最高責任者リン・エバンス氏が本県を現地視察に訪れ「建設は北上山地に限り検討する」と表明した。

日本政府は14年に有識者会議を設置し、科学的な意義などを議論している。15年度にもまとまる会議の結論を踏まえ、誘致を判断する見通しだ。建設期間は7～10年を要し、順調に進めば20年代後半の完成が見込まれる。

実現すれば、国内外の研究者や家族約1万人が周辺地域に移り住むとされる。受け入れ環境の整備に向け、建設ルートに当たる奥州、一関、気仙沼3市は連絡会議を開催。市民レベルでも講演会や多言語情報の充実など活発な取り組みが展開されている。

達増知事は「人類に大きく貢献し、岩手の未来をつくり出す力になる」として東北の官民を挙げた誘致運動を繰り広げ、実現を目指す。

国際リニアコライダー（ILC） 地下トンネルに設置する31～50キロの直線加速器を中心とする大規模研究施設。電子と陽電子をほぼ光の速さで衝突させ、素粒子の性質を調べることで宇宙誕生の謎を解明する。世界に1カ所だけ造る国際プロジェクトで、想定される建設費は加速器だけで約8300億円。経済波及効果は建設開始から30年で約4兆3千億円とされ、「未知数」として加味されていない技術革新などの効果も期待される。

◀参加者ひとこと◀

将来は科学研究者に

宮城県名取市 宮城一高1年 野角（のかく） 真穂さん(16)

学校の研修で茨城県つくば市の高エネルギー加速器研究機構（KEK）を視察し、東北がILCの候補地だと知った。講演を聞き、受け入れ側もまちづくりなどを考える必要があると思った。将来は物理学など科学の研究者となり、ILCに関わる仕事をしたい。

できること模索する

一関市旭町 会社員 須田 欣也さん(52)

復興のシンボルを発信する世界会議でILC誘致がテーマに上がり、認知度も高まったと思う。地方は人口減少などの課題がある中、一関市では企業が誘致検討会を開くなど、波及効果への期待が大きい。自分たちにできることを模索するよう認識を新たにした。

世界とのつながりを

奥州市江刺区梁川 英語講師 菅原メリセラさん(45)＝ケニア出身

ILC誘致に外国人の視点から取り組む「ILCサポート委員会」の仲間と参加した。日本の住環境や利便性、テクノロジーを岩手から世界に発信できるチャンスになる。きょうの話を参考に、皆で協力して世界とつながるための地域づくりを考えていきたい。

国連防災世界会議